

● 中 部

伊 藤 美由紀

昨年に続き中部地方のクラシック音楽界もコロナの影響により回された。

3月スタートの名古屋国際音楽祭も海外演奏家の渡航がかわず6公演中止で、日本人のみの奏者による次の2公演となった。海外からのソリストは日本人に変更となり鈴木優人・指揮、パッサ・コレギウム・ジャパンによる日本語字幕付きのパッサ《マイ受難曲》は、鈴木の前首席指揮者就任後の名古屋での初披露公演となった。川瀬賢太郎・指揮、名フィルによるガラ・コンサート『若き巨匠たちの協演』では、名古屋出身チェロの佐藤晴真によるドヴォルザーク《チェロ協奏曲》、サクソフォンの上野耕平、ピアノの山中惇史、打楽器の石若駿による吉松隆のサクソフォン協奏曲《サイバーバード》を披露した。

名古屋フィルハーモニー交響楽団の定期では、海外からの指揮者、ソリストの来日を予定していた5、6、10月の3公演で国内の音楽家により内容変更となった。1月は尾高忠明の指揮で、パスフニクの《カティンの墓碑銘》、大編成の重厚なテクスチャーと複雑な音響のルトスワスキの《管弦楽のための協奏曲》を含み、2月は指揮者、川瀬賢太郎により名フィルコンポーザー・イン・レジデンス3代目の坂田直樹の委嘱作品1作目となる《拍動する流れ》の初演とマラー《交響曲第1番》、ベートーヴェン・トリビュートシーズン最後の3月は小泉和裕の指揮によりブラームスで閉めた。4月からの新シリーズ：『スペシャリティ』は、『沼尻竜典のシヨスタコヴィチ #11』で幕を開け、5月は『大友直人のフレンチ』としてプログラム変更され、ピアノの岡田奏をソリストに迎えプーランクの《ピアノ協奏曲》、ラヴェルの《ボレロ》を含み色彩豊かな音色を楽しませた。6月も同様にプログラム変更により『鈴木優人のラテン』で、村治佳織をギターに迎えロドリゴの《アランフェス協奏曲》で観客を魅了し、後半は昨年中止された公演に出演予定であった岡崎混声合唱団、愛知県立岡崎高等学校コーラス部のメンバーとソリストを迎えてのフォーレの《レクイエム》。合唱団メンバーはマスクのままで歌唱であったが違和感なく透明感のある若い美声とオーケストラ、オルガンとの調和が、清澄さを際立たせた。7月は創立55周年記念と重なり、公演後には音楽監督の小泉和裕から観客への挨拶もあった。秋以降は9月の『小泉和裕のブルックナー』で始まり、名フィルと6作品目となる《交響曲第5番》1曲に焦点を当てる。10月は曲目変更によりバーンスタインを師匠とした大植の解釈による『大植英次のバーンスタイン』。11月『小泉和裕のフランク』では交響曲の醍醐味を味わう名曲コンサート、12月『川瀬賢太郎のロット』では葵トリオを迎えてカゼッラの《三重協奏曲》、ロットの《交響曲第1番ホ長調》。名フィル市民会館名曲シリーズは、『小泉和裕のマイ・フェイヴァリット・ピース』（4月）、『リクエスト・コンサート第2弾』（7月）、コロナ影響による出演者変更により『下野竜也のイタリアン・マスターピース』（8月）となった。名フィル特別演奏会では6公演が中止（その内4公演が収録配信）。『平日午後のオーケストラ』シリーズは8月のvol.8をもって終了し、9月には『第1回こども名曲コンサ

ート』がスタートした。12月の2日間の『第九演奏会』は両日ともに完売で好評であった。

セントラル愛知交響楽団の定期では大きな変更はなく、新シーズン最初の5、7月は常任指揮者の角田鋼亮による『パッサへの敬愛』をテーマとし、6月はサクソフォンの須川展也を迎えて松村秀明・指揮により管楽器の魅力を楽しめるプログラム。9月は太田弦を迎えリスト《交響詩・前奏曲》、フランク《交響曲ニ短調》、そして愛知県出身若手ピアニスト、山中惇史との共演でリスト《ピアノ協奏曲第1番》。11月は角田鋼亮の凝ったアイデアにより『こども、遊び、バレエ』をテーマに選曲された。今シーズンは毎回、指揮者によるプレトークもあり、マイナーな作品も含みテーマに因んだ興味深い選曲となっていた。昨年度定期で延期となっていた山本裕之のユーフォニアム（小寺香奈）とオーケストラの為の委嘱作品を含んだ公演は8月にアクトシティ浜松で開催された。

中部フィルハーモニー交響楽団の定期は、第74回（2月）『飯森のチャイコフスキー 生誕180周年記念3大交響曲ツィクルス2』、第70回（延期公演／5月）『秋山のベートーヴェン・ツィクルス1』、名古屋市出身のピアニスト阪田知樹との共演で《皇帝》を含んだ第75回（7月）『秋山のベートーヴェン・ツィクルス2』、第76回（9月）は緊急事態宣言の為、中止。第77回（10月）『秋山のベートーヴェン・ツィクルス3』は、郷古廉を迎えて《ヴァイオリン協奏曲ニ長調》と《田園》。昨年中止された『創立20周年記念公演』（8月）は1年越しに芸術監督・秋山和慶により、愛知県出身ヴァイオリンの竹澤恭子、愛知県芸術劇場専属オルガニストの都築由理江を迎えて無事に開催された。

愛知室内オーケストラでは、創立20周年を迎える来年度、楽団に初めて迎えられる音楽監督に就任予定の山下一史・指揮による2回にわたる『ストラヴィンスキー没後50周年記念コンサート』（11・12月）でストラヴィンスキーの新古典主義スタイルの異なった編成による代表作品を紹介した。Part1では編成が1曲ごとに大きくなり多彩に変容する響きの変化と快活な演奏を堪能できた。『サン＝サーンス没後100周年記念コンサート』（7月）では、矢崎彦太郎（指揮）で窪田健志（打楽器）によるジョリヴェ《打楽器と管楽器のための協奏曲》、都築由理江（オルガン）によるサン＝サーンス《交響曲3番》を披露した。

愛知県芸術劇場ミニセレでは、野村誠のメシアンの為に作曲した作品、メシアンの2台ピアノの曲を含む中川賢一、野村誠によるピアノ・コンサート『愛と知のメシアン！！』（1/7）、『八木美知依・箏の世界』（5/22）、ピアノの向井山朋子のアイデアによる映像、電子音、いけばなとピアノによる『KUMANO』（10/22）で独創的な音楽世界を発信した。『ミッドジャパンプ音の芸術祭』は、2～3月にかけて中部地方の作家を中心としたテクノロジーを使用した作品をオンライン配信。ユーフォニアムの小寺香奈による『ディスクヴァリー・ユーフォニアム』vol3（3/6）は菊地秀夫（クラリネット）と、vol4（11/14）は藤田郎子（ピアノ）とのデュオで、徳永崇、稲森安太己、松平頼暁の委嘱作曲家による2公演での2作品を初演。名フィル首席打楽器奏者の窪田健志による『打楽器レクチャーコンサート』（2/27）ではCD収録作品7曲による演奏。窪田がリーダーの『くぼった打楽器四重奏団 打楽器アンサンブルの変遷』（12/6）は、現代作品からポップでリズムカルな作品まで多彩な打楽器を含んだ内容、マリンバの小森邦彦主催『マリンバと弦による室内楽の世界』（12/10）では、弦楽四重奏団SAYとの共演によるクラツォウ、ルイス・ティノコの作品を含み、共に良質で楽しい現代音楽公演であった。